

「神堤、高大堰そして秀衡堰」

「松岩百話集」、「上沢地区自治会三十周年記念誌」から

現在の気仙沼市松岩地区は、昭和四十年代以前は大農村地帯ということ認識されていた。昭和四十年代に住宅ブームの波で旧市内居住民が郊外へと移るようになったため大農村地帯という認識は薄れていったが、当時の一般市民にとっては、まさにそのとおりであった。理由はわからないが、百姓がわざわざ鼎浦を船で渡り、対岸の小々汐、梶ヶ浦から松崎村の田畑の耕作に来ていた。米の取れ高は市内随一で、気仙沼市の穀倉といってもよいほどであった。これは、江戸時代もしくはそれ以前から貯水池(堤)や水路(堰)の工事が営々として行われてきた恩恵である。

堤や堰の歴史を知ることが、そのまま地域の産業の歴史や文化を知ることになる。この、文化としての工事について、紹介しきれないほど多くの伝承や句碑がある。ここでは現在の面瀬地区と関係の深い堤や堰について「新・昔ばなし」として物語りた。古来からこの地で営みを続けてきた人々の知恵と偉業に感動し、感謝すること

につながることを願って…。

神堤と高大堰は、今をさかのぼること二百七十年ほど前に完成したという。江戸時代、享保十七年春のことである。

享保といえば「暴れん坊將軍吉宗」の治世である。徳川吉宗の政治は「享保の改革」と言われた。徳川幕府の財政改革を中心に諸政策が行われた。特に新田開発には力が入れられ、米の石高も江戸期での最高値となった。孫の白河樂翁侯・松平定信は寛政の改革をおしすすめた。現在多くの学校が修学旅行で訪れる会津若松。松平氏や保科氏について、担任の先生が情熱的に言及するのであれば、修学旅行の学習価値はいっそう増すだろう。

神堤は現在の三峯の南西、赤柴山の麓にある。縦横五十間(一辺が約九十メートルの正方形)の農業用貯水ダムである。赤岩、松崎の田畑をうるおす目的でこの堤と堰をつくるために、享保年間だけで二十年の歳月を要した。完成には二代の肝煎(きもいり)と、農民の知恵と技術、そして汗が必要だった。堤だから当然、貯水した雨水や沢水をもらしてはいけない。コンクリートなどない江戸時代に、堤の土手と底を仕上げた際には特殊な技法が必要だった。松岩百話集によれば、はじめに土と塩を混ぜ合わせ、臼(うす)でついて、それに粃殻(もみがら)をまぜ、さらに摺(す)る。これを使って堤の土手を巻いたというのである。これは、土の成分にもよるが、土中のカリ分と塩のナトリウム、粃のケイ素を化学反応させていると考えられる。今で言う『ハイテク』であ

った。このようにして堤にたたえられた用水は、堰を通り田畑をうるおすのだ。赤岩、松崎の起伏激しい土地に用水路をほることは簡単なことではない。非常に高い技術と労力が必要だった。

江戸時代、新田開発にともなう灌漑(かんがい)工事は各地で行われた。二宮金次郎による今の神奈川県小田原藩の桜町の工事、田沼意次の手賀沼、印旛沼の工事など、すべてが難航を極めている。

そんな中で、この高大堰の完成には古来から伝わる光測量が利用された。何千年も前から戦略のために使われてきた「狼煙のろし」は光通信であるとある人は言ったが、この高大堰にはレーザー測量が利用された。あえて夜を選び、測量地点に松明(たいまつ)を持たせて高低差を測量した。光の直進性を利用したものである。平安時代、奥州藤原氏のころ、当地方で、すでにこの技法が行われたという。今も残る秀衡堰の話だ。

奥州平泉の全盛期のこと。秀衡(ひでひら)軍が安倍氏の残党と戦うようになった。秀衡軍の武将から松崎近辺の部落に命がくだった。羽田の奥から物倉山にかけて堰を掘るようにとのこと。何の目的か、約二十里にわたる堰だ。各部落の長に

「この一帯の集落の者で、働ける者は全て役につけるべし。急ではあるが、明日の夜明け前までに堰を掘り通すように。」

とのことであった。陸奥東北を治める藤原秀衡の命令は絶対である。誰も逆らえは

しない。



村に母と子が住んでいた。何かわけがあって身を隠しているのだとうわさする者もいた。目鼻立ちの整った、どこか気品のある親子であった。母のおみわは、ひでたかを可愛がり、ひでたかは母を慕った。ひでたかは他の子らよりも賢いが体は弱かった。十九才になっても、田んぼ仕事の後は、夕飯も食えず寝込むことが多かった。村主様もこのことを分かっていた。集落で行う田んぼ仕事も真夏の暑いときは、ご免をくださった。そのかわりひでたかには郡役所における書き物などをしてもらうのだ。この辺一帯で文字の読み書きができる者がそう多くはいない時代ゆえのことだった。命令を受けて村主は思案した。秀衡の命令には絶対服従であるが、あのひでたかが夜の重労働に耐えられるのか。ただでさえ弱いのに、このごろは体調がかんばしくないもので、役に出せば命を失いかねないのでは……。

母も同じ思いだった。ひでたかの出役を見送った後、母のおみわは、神仏に祈るしかなかった。一心に仏に祈っていると、家の裏でバタバタ動くものがいた。おみわは祈りをやめた。そして「ありがたや御仏様。」と独り言を言った。

夕闇が羽田の山を真っ暗にしてしまった。この夜は新月。秀衡の家臣の号令に従って羽田の山から高倉山まで松明をもった男たちが同じ間隔で五十人ほど並んで、武士たちが村の者を右だ左だ、後ろだ前だと指図した。

松明を持たされた村の男が

「何すんだへ。」

とひでたかに話しかけた。ひでたかは

「これは堰の水が上から下へと間違はなく流れるようにするために、松明の光を利用して、下の地が上より高くないように目安をつけているのです。このやり方は唐の国の運河をつくる方法と同じですよ。」

と言った。話しかけてきた男はおどろき、すごい、何でそんなことまで知っているのか、と目を大きく見開いてひでたかを見た。

松明をともしたところに縄を張る。それからいよいよつらい土掘りと石起こしだ。

「きさま、本気で働け。」

「カが入っていない。」

と、ひでたかは役人からおむちで打たれた。三度目には立ち上がることもできぬほど…そして四度目。度重なるおむちの嵐に、とうとうひでたかは虫の息となっていた。これ以上おむちを打たれたら…村の者たちがみな不幸な結末を思ったその時だ。山のふもとの方から

「コケッコウ、ケッコウ」

と、真っ暗な闇に鶏の鳴き声がとどろいた。

おどろいた秀衡の家臣は、まだ暗い空に目をやりながら、

「もう夜明けが近い。堰をつくって敵軍を水ぜめにしようとしたのだが…夜が明けるのではしかたがない。百姓どもよ、急いで我が家にもどれ。今夜のことは決して口にしてはならぬぞ。」



と命令した。そして、数名の家来とともに馬に乗り、太田山の方に向かった。秀衡軍は闇夜に消えていった。

さて、この後だが、すぐに夜が明けたかというのと、そうではなかった。なんと、夜明けは、それから何刻もたってからだった。真っ暗な闇にとどろいた鶏の鳴き声は、ひでたかの母おみわが、息子の命を助けようとして鳴かせたものだったのだ。そう、神仏に祈った母の目の前に現れたのは、救いの雄鶏だったのだ。

いつの世も、母はわが子のためには知恵がはたらくものである。もしくは御仏が母の思いに慈悲を垂れたもうたのであるうか。



神堤



さて、高大堰は金産の盛んだったこの地にとって、金を含むお石の精錬や砂金の精選にも大いに役立ったといわれている。また、実によく、百姓に良水を与えてくれた。そのうえ、金鉾脈を通ってくる水なので、その効用もあってか、米は味がよかったそう。田が潤うことで、面瀬川と神山川から魚など直接の恩恵を受けられない松崎や赤岩の辺地の人々も、良米という恩恵にあずかることができた。あまりの豊穡と良米に、人々は、ここでとれる米を「金の米」とまで名付けたそう。めでたし、めでたし。